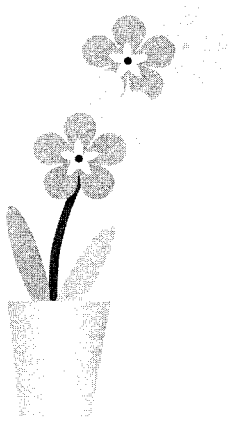




# ちよんゆきこ



平成二十一年二月  
日吉町人権教育総合推進会議

皆様からお寄せいただいた身近な生活の中での心温まるエピソードを、人と人とのふれあいの体験談集としてまとめました。この「ちよつといひ話」が、人権への理解を深める機会となれば幸いです。

## ちよつといひ話

娘が幼い頃、友達に意地悪をされて泣きながら帰ってきたことがありました。

「自分がされて嫌なことは、人にもしないようにね。」

話を聞いた私は、そう言って娘を抱きしめました。

しばらくして、私が仕事の人間関係で悩み、夫に愚痴をこぼしていたときのこと。娘が私をきつく抱きしめて、同じことを言ってくれたのです。小さな手の意外なほどの力強さに、うれしくて涙が出ました。



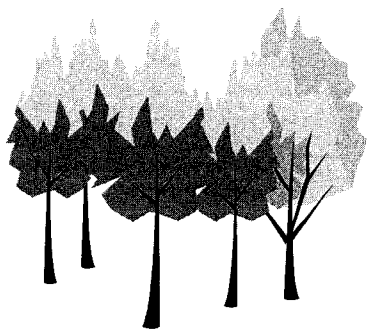
教室でプリントを配りました。保護者向けのお知らせのプリントなのに、「ありがとう。」

と言って受け取ってくれた子がいて、その言葉にとっても感激しました。

自分が何かを配ってもらうとき、

「ありがとう。」

と言える人になりたいと思いました。



その日は、夜遅くまで出かける用事があり、帰りは一時をまわっていました。雨なのに傘を持っていなかった私は、交差点の信号で「早く変わらないかな」と待っていました。道路には、信号で止まっているトレーラーがいて、「こんなに遅くまで働いている人は大変だな」と思いました。

しばらくして信号が変わり、足早に家へと向っていると、私の横で車のブレイキ音がします。顔をあげてみると、さっきのトレーラーらしき車で、助手席の窓が開いています。

「濡れちゃうでこの傘持つていって！もういらん安い傘だから！」  
そう言って透明なビニール傘を差し出してくれます。

正直、びっくりしました。あの交差点から、わざわざぐるっと回って見ず知らずの人のために傘を貸してくれるというのですから。本当にうれしい出来事で、少しの思いやりがこんなにも人を温かな気持ちにさせるのだと改めて思いました。



立ち会い分娩の時のこと。痛みには耐えながらも無事出産。ホッとした瞬間、主人がそっと手を握り、「ありがとう。」

と一言。思わずポロツと涙が出ました。

日々の生活でも、何気ない会話の中での、優しい気持ちになる魔法の言葉「ありがとう」。子どもたちに伝えていきたい言葉です。



Mさんは小学一年生。とても恥ずかしがり屋で、授業中人前でお話ができません。がんばって発表しようとしても蚊の鳴くような声量で、聞こえるのは一メートル以内といたところ。休み時間はとても元気にお話できるのに、なぜか皆の前に立つと自信がなくなってしまうのです。クラスの仲間の中には、「Mちゃんがんばれ」という励ましの気持ちと、「無理だよ、どうせ聞こえないよ」というあきらめの雰囲気相半ばしていました。時々起こる、

「聞こえません。もっと大きな声で言ってください。」

という言葉が、ますますMさんの心を閉ざしていくようでした。

ある日、担任の先生が、

「みんなが本気でMさんのお話を聞こうとすれば、きっと聞こえます。」

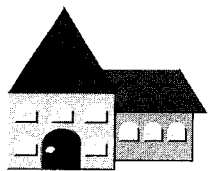
と言われ、教室の真ん中辺りでしゃがみこみ、笑顔でMさんを見つめました。みんなも黙ってMさんの話を待ちました。しばらく待ちました。教室中がしーんとなり、水槽のポンプの音がかすかに聞こえました。やがて隣のクラスの会話も聞こえるようになりました。

その時です。「私は……」ぼそぼそとMさんが話し始めました。

「みんな、聞いたか、聞こえたね。」

「うん。」

「よし、万歳だ。」



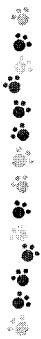
興奮した先生の声につられてみんなで万歳三唱をしました。それ以来Mさんの声はだんだん大きくなり、二学期後半にはもう普通の声で話せるようになりました。当時、私は一番後ろの席にいました。恥ずかし気で嬉しそうなMさんの顔は覚えていますが、あの時のMさんの声が確かに聞こえていたのか、よく思い出せません。

子育てといいますが、逆に子どもから教えられることって結構あります。

娘が小さいころ、毎日のように、「大好きだよ。」

と言ってくれたり手紙をくれたりしました。何回言われてもうれいもので、とても幸せな気分になりました。私も見習おうと思ひ、娘や息子や主人に、恥ずかしいけれどメールや手紙で伝えました。親子だから言わなくてもわかると思ひがちですが、やっぱり直接伝えると子どもも安心するのではないかと思ひます。

今はだいぶ大きくなり、言ってくれなくなりましたが、この先もずっと愛情表現はしていこうと思ひています。



私の教室では、「ありがとうございます」「お願いします」という言葉がよく聞こえます。

例えば、プリントを配ったとき、必ず「ありがとうございます」と言えること。

例えば、提出物を机の上に置くとき、必ず「お願いします」と言えること。

当たり前のことが、実はとってもうれしいです。



子ども達が大きくなり、「今年は形だけの節分でいいか」と思いつつ、昔の豆まきの様子を思い出し、心の中で微笑んでいる。

我が家に長女が生まれて初めての節分。私が鬼のお面をつけた時点で、大泣きされた。おまけに、夜泣きまでされて何ともならない一年目の節分。二度目の節分では、何度も、

「鬼はお父さんだよ！」

と教え、母親と一緒に鬼に向けて豆の投げ方まで練習した。しかし、鬼が玄關を開けて登場した時点で、豆の入ったマスをひっくり返し、涙ながらに終了。三度目の節分は次女も参加し、少しはたくましくなっただろうと期待をした。しかし、鬼の登場と共に、姉妹で豆を投げ捨てて逃げ出し、布団にもぐり込んでしまう。やはり豆まきは成立しなかった。

それから毎年、豆まきに挑戦。私がかんばりすぎるのか、いつも、

「鬼は外！」

の台詞までいかない。三女も生まれ、新しいチームで困難を乗り越える動きを期待するが、あまり変化はない。家中の窓やドアを開け行うので、鬼がどこから登場するか、鬼が私だとわかっているも怖いらしい。三人で固まり、豆を持って逃げまどう三姉妹。怖くて窓やドアに近づけない。外に向かって豆をまく事ができない。もちろん鬼にぶつけるなんて当然できるわけもない。逃げる時に豆をこぼし、逃げまどう足で踏まれて、粉々の豆だけが部屋の中に散乱する。悲惨になった家中に掃除機をかける。なんとも情けない。こんな弱虫では、本当の暴漢に襲われたらひとたまりもないなあ、いらぬ心配までよぎる。

それでも何時からか、子ども達は節分の豆まきをかなり楽しみにするようになり、鬼のもつ金棒まで工夫して作りだす始末。歓声と悲鳴で、警察や近所に連絡してから行うべきか悩むほどの状態となった。次第に鬼をやっつけるために、姉妹で協力するようになってきた。待ち伏せし豆を投げつけ

たり、はさみうちにしたり、楽しくてしょうがない様子。雰囲気に乗やすい鬼は、豆の攻撃を受け、折しも降り積もった雪の上、ボタン！と大の字になって倒れた。高校生になっていた長女は、「ここまでやるか！」

と大笑い。今は亡くなった母の笑顔もそこにはあった。

家族が多くて良い事なんて割合少ない。大人になればなおさらだ。風呂もトイレも食事も、それぞれの自由にならない事が多い。観たいテレビのチャンネル、こたつの座る場所、足の入れ場所さえも取り合って暮らしている。しかし、年中行事は楽しい。

特に節分は：



家族みんなが出かけ、一人でパソコンを開いて仕事をしていた日のことです。誰かが玄関を開けて、「誰もおらん？」

と声をかけました。

「はい。」

と言って玄関に出ると、隣のおばあさんでした。なんだろうと思ったら、

「今雨が降ってきたで洗濯物中入れといたよ。だいぶ乾いとったで大丈夫やと思うけど。」

田舎の家なので隣といっても百メートルはあります。そこから走ってきて洗濯物を入れてくださったわけです。普通だったら自分の家の洗濯物を入れて終わりですが、隣の家まで気にかけているおばあさんを見てとてもあたたかい気持ちになりました。自分の事だけでなく回りに目を配れる、そんな

人間に自分もなりたいたいと思いました。



朝、横断歩道を歩いている小学生がいました。前に二〜三台の車がすでにとまっていたので、私も車を止め待っていました。その小学生はお辞儀をしながら小走りですわって渡っていました。そして渡り終わった後も、帽子をとり、深々とお辞儀をしていました。しかも、先頭の手だけなく、その後ろに止まっていた全ての車の運転席に向かってお辞儀をしていました。横断歩道は歩行者が優先なので、車が止まることは当たり前なのに、礼儀正しく温かい気持ちになりました。



高校三年生の二女。大学受験を迎えた。受験日当日。朝寝坊で、いい加減な子ではあるが、さすがに自分で起きてきた。しかし、しばらくすると電話と携帯が鳴りっぱなし。二女は電話の対応に大忙し。電話に出ると、

「ありがとう。がんばるよ。」

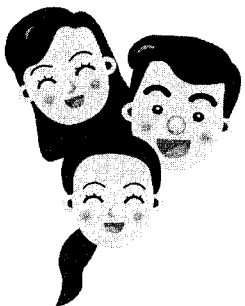
などと応えている。どうも二女の友達が、

「朝ちゃんと起きられたか？」

「忘れ物はないか？」

と心配して電話をくれているらしい。

優しい友達に恵まれた大きな感謝の気持ちと共に、これほど多くの友達に心配をかけてしまってい



る娘の普段の生き方に頭が痛い。よくよく聞いてみると、この受験そのものが、周りの友達を支えなくして実現しなかったようである。二女は、願書締め切りの日にちを間違えており、提出ぎりぎりになったにもかかわらず、家のコピー機の中に提出しなければならぬ書類を忘れて登校。半べそをかきながら母親に電話をするが、母親は母親でどうしても手が離せない。友達が心配して、タクシーを呼び、家に書類を取りに帰る手配をしてくれた。また、何時までに郵便局に書類を出せば受付に間に合うのか郵便局に問い合わせさせてくれた。全く、どうしてこれほどまでにぼやっとしているのか情けない。なんやかんやで、受験日を迎えたわけである。

何とか受験を終え、無事家に帰ってきたと思っていると、朝持って行った弁当に手がつけられていない。未だかつて、弁当を残すことなど一度もなかった二女。母親が心配して聞いてみると、受験でたまたま隣に座っていた子が、午後からの面接が心配で、緊張のあまり弁当が食べられなかったらしい。しかし、せっかく作ってもらった弁当を残して、心配をかけるのがいやで困っていたらしい。二女は自分の弁当を隠したまま、その子の弁当を全てたいらげた。ずぼらなのだが、妙なところで気が回る。そのあげく、面接の待ち時間に居眠りを始めた二女をみて、その子の緊張が吹っ飛んだそうである。どうしようもない二女であるが、その子はとても感謝してくれたそうである。他にも面接の待合室で、不安でいた他の受験生に向かって、

「私が試験官なら、あんたみたいにかわいい子、部屋に入った途端、花マル合格！」  
と手をいっぱい広げて、その子の顔の前で何重にも大きなマルを描いて笑わせたようである。

結局二女は、この大学に合格することが出来た。奇跡である。すると今度は、一人で受験に行く友達と一緒にいって行ってあげる、と言い出した。こんなに頼りにならない娘なのになぜ？と聞いてみると、その友達は、二女と一緒にいると何となくリラックスできるようである。母親はこれを聞くと、時間に遅れては大変だと、朝、我が娘の受験以上に気を遣い、服装チェック、弁当の準備：力を入れて送り出した。

受験は合格することが第一で、他人を蹴落としてでもライバルに勝つ。受験は厳しいものだといわれる。しかし、今年の我が家の受験は、仲間の大切さが身にしみた、温かい受験だった。



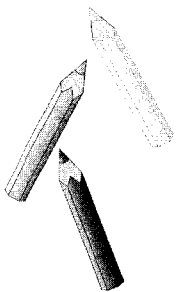
家族のお見舞いのため、電車で二時間半かかる病院まで行った日の帰りのこと。

小さい子ども連れで、帰りの電車を待つホームで子どもはぐずり、荷物は重く、ヘトヘトでした。しかもホームに到着したホームライナーは夕方のラッシュで満員。ぐずる子どもを抱っこしてその電車に乗りました。

しばらくすると、少し離れた座席から、初老の男性が人ごみをかき分けて私の方へ近づいて来られました。そして、

「あそこに私の指定席がありますから、そこに座ってください。」  
と声をかけてくださいました。本当なら私が席を譲るべき年齢の方だろうと思いましたが、にっこりと笑顔で私が座るのを待っていてくださるのを見て、席を譲っていただきました。

いつか子どもが大きくなったら、この話を聞かせたいと思います。そして、この男性のような大人に育つように、私自身も周りの人に優しさを配っていききたいなあと感じました。



アパートに住んでいるのですが、隣の人の顔を見ることがありませんでした。朝出かけるときや、夜帰ったときなど、同じ棟にいる人には何らかのかたちで出会っているものです。ところが、隣の住人とだけは顔を合わせる機会がありませんでした。壁越しに人の気配はするのです。深夜、シャワーを使っているらしき音が聞こえることもありましたが、

駐車場に車もないし、どこかへ出かける様子もない。いったい何をしている人なのだろう。きっと怪しい仕事をしているのだ。ネット詐欺や麻薬の密売でもしているのではないか。物騒な事件が多発している昨今、よからぬ想像がふくらんでいました。

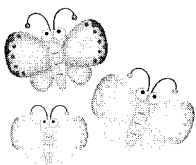
そんなある夜、チャイムが鳴ったので玄関のドアを開けると、

「○○号室のものです…」

ええっ！ひょっとしてこの人は：隣の密売人？

「この封筒なんですが、間違って私のところに配達されていました。宛名も確かめずに開けてしまったので申し訳ありません。すぐ気がついたので中は見えていませんから。本当にすいませんでした。」と詫びながら、私宛の郵便物を渡してくれました。

すごく正直でいい人だったのに、勝手な思い込みをされていてごめんなさい。



妻と二人で中華街を歩いていたら時のことです。休日とあって通りは観光客で大変な賑わいでした。ふと視界がひらけたと思ったら、赤ちゃんを背負ったお母さんがしゃがみこんでいます。側には三歳くらいの子が、体調が悪かったのでしょうか、食べたものを道にもどして泣いていました。

若いお母さんは、突然の出来事に戸惑った様子で、女の子が嘔吐したものを拭いています。しかし、

小さなハンカチでは始末できるはずもなく、汚れは広がるばかりです。

多くの観光客が横を通り過ぎるのに、一人として手を貸そうという人はいません。

「世間って冷たいもんだよね…」

私がそう言いかけたとき、妻はその親子に駆け寄り、バックからハンカチやらポケットティッシュやらハンドタオルやらを取り出して、女の子の世話を始めたのです。

思わず言葉を呑み込みました。冷たいもんだよねと傍観者を決め込んだ自分が恥ずかしく、また妻が誇らしく、私も遅ればせながらポケットのハンカチをにぎったことでした。



私が二十歳の頃の話です。私には九十歳をこえる祖父がいました。九十歳をこえても、眼鏡なしで新聞は読めるし、耳も遠くなく、丈夫で毎日畑仕事に精を出しているおじいちゃんでした。

私が成人式を迎える頃、体調をくずし寝たり起きたりの繰り返しになりました。秋頃から調子が悪く、大丈夫かなと心配しながらの年越し、お正月でした。

その頃から、おじいちゃんの寝ているベッドの前には、カレンダーが貼ってあり、一月十五日に赤丸が付けてありました。その時は深く考えることもなく、「成人式の日には丸がついているなあ。」ぐらいにしか思いませんでした。

成人式の日、振り袖を着て、久しぶりに会う友だちといろいろ話をしたり写真を撮ったり、ゆっくりに時間を過ごしてから、祖父の待つ下呂の家へと向かいました。家につくとベッドでおじいちゃんが待っていました。顔色の悪いおじいちゃんを見て、何と声をかけたらいいか分からないままいると、おじいちゃんが和紙の巻紙を取り出しました。

そこには、「〇〇迎成人乃日」と習字で書かれていました。起き上がれないはずなのにとびつくりしていると、成人の日の朝、ベッドに座って書いてくれたのだと教えてくれました。傾いている一文字一文字におじいちゃんの九十二年間のパワーが込められているようで、必死で書いてくれたおじいちゃんの気持ちを思ったら、嬉しくて、本当に心底笑顔でおじいちゃんと写真を撮ることができました。その一週間後、おじいちゃんは亡くなりました。おじいちゃんは私の成人の日を指で数えながら生きていてくれたんだなあと、今振り返って思います。

おじいちゃんの「〇〇迎成人乃日」の掛け軸は、九年後、私の結婚式の朝に、実家の床の間に飾られました。おじいちゃんの力強い字が、私の結婚も祝ってくれているようでした。



私の家の近くには、饅頭屋がたくさんある。その中の一軒が、「栗きんとん最中」というヒット商品を開発した。数ヶ月後、その商品とほとんど同じものが近くの饅頭屋の店頭に並んでいた。開発したお店の友達や親戚から、

「〇〇饅頭屋が、栗きんとん最中とそっくりなものを売っているから、抗議するなり、訴えるなりしたほうがよい。」

と忠告があった。

それを聞いた店主は、

「私は、誰かにまねしてもらおうぐらいの饅頭を作りたかった。まねをされることは、私にとってとても光栄なことです。それを聞いてとてもうれしいです。どんどんまねをしてください。」  
と言い、笑っていた。

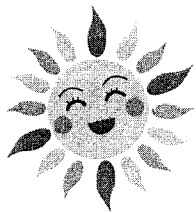
その後、そのお店は繁盛し続け、テレビ局の取材も来るほどになった。



四年ほど前、私の二男の同級生（女子高校生）が自殺をして亡くなった。遺書もなく、最後まで自殺の原因は分からなかった。両親にとつて、自分の子どもが原因不明で自殺をし、亡くなることほど辛いことはない。

その女子高生の葬儀の時に、お坊さんが次のようなお話をしてくれた。

「人間が生きていくためには、息をしなくてはならない。息は、まず吐くことから始まる。そして、息を吐いた後に新鮮な空気を取り入れ、生きることができると。これは、人間の心と同じである。心の奥底にある悩み、悲しみを吐き出して人に伝え、そして楽しい感情を心の中に取り入れることによつて人は生きていくことができる。溜めてばかりいると、吐くこともできず、取り入れることもできず、苦しむこととなる。今、心の中でいろいろな苦しみを溜めている人がいれば、すぐに吐きなさい。そうすれば、自然と生きる道が切り開けるから…。」



電車に乗っていたときのことである。

その日の電車はいつになく大変混雑していた。ふと顔を上げてみると七十歳ぐらいの老人が重そうな荷物を抱えて立っていた。私は、席をかろうか一瞬迷ったが、重そうな荷物を再度見て思い立った。「重そうな荷物ですね。どうぞこの席に座ってください。」



老人は、片手で「すみません」という合図を私に送り、席に座った。そして、老人が降りる駅に着いたとき、私の肩をポンポンと叩き、「ありがとう。おかげで助かったよ。世の中、こんな人ばかりだったらなあ。」とお礼を言って電車を降りていった。



「ちょボラ」って知っています？  
テレビを見ていると宣伝でよく聞くようになったのですが、「ちょボラ」は「ちょっとしたボランティア」だそうです。

先日、用事があり、名古屋から岐阜に向かった。岐阜で用事をすませ、電車で帰ろうとJR岐阜駅に行った。JRですから、切符を買わないと電車に乗れません。切符売り場で瑞浪までの切符を買おうとしていた。そしたら…。

「えっと、大垣まではいくらだね？」

隣のおばあさんが、ボソボソと言っている。

「大垣までの切符ですか？」

「そうなんですわ、一体いくら分からんもんで…」

「なんでしたら、買いましようか？」

「ありがとう、いいんかね？」

おばあさんは、かばんから財布を出し千円札を出した。その千円札をもらい、切符を買っておばあさんに手渡した。



「ほんと、すまんね。」

何度も何度もおばあさんは私に言った。何かこちらが申し訳ないような感じがするくらいである。乗りたい電車があったので、急いでホームに向かった。後ろを振り向くと、おばあさんが、まだ頭を下げている。

その日はなかなか用事が上手く進まず、イライラしていた。その帰りにおばあさんに会ったのである。ちょっとしたことかもしれない。でも、ちょっとしたことでも、人のためになることをするとこんなに気分がよくなるんだと思った。

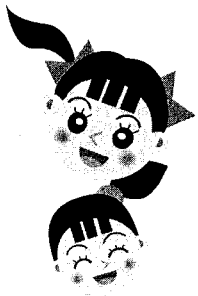
この後、電車の中で「イライラした心」が「優しい心」になっていたのは自分でも分かった。



二女（五歳）がトランプで私（父）に負け、そのショックで愚図っていたとき、長女（七歳）がすぐに妹に寄り添い、

「さっきは、私が〇〇ちゃん（二女）に負けたよね。〇〇ちゃんも上手になったよね。」  
と言って、慰めてくれた。

その長女の姿を見て、体だけでなく心も大きくなっていることに感動し、恥ずかしながら涙が頬をつたわった。



有料駐車場に駐車した車に戻り、料金所に向かったときのことである。その日は、近くで葬儀があり、多くの車が一斉に料金所に集った。私は、駐車料金を支払うために駐車券を出し、機械に入れようとしたがうまく入らない。何回も動作を繰り返し返したが、機械に入っていない。しだいに車は二十台ぐらいい列をつくり、私はますます焦りパニック状態になってしまった。何が何だか分からず、お札まで取り出して機械に入れようとしたとき、二台ぐらい後ろの車から男の人が降りてきて、私の所に近づいてきた。きつとイライラして、怒ってきたかもしれないと思い、恐々振り向くと、

「うまく駐車券が入らないのですか。焦らなくてもいいですよ。駐車券を私に見せてください。」と優しく言ってくれた。私はすぐに駐車券をその男性に渡すと、駐車券を機械に入れてくれた。

「駐車券を入れるほうが上下反対でしたよ。駐車料金は無料で出られますよ。」

と言って、その男性は自分の車にすぐに戻った。

私は、その男性に怒られるかと思っていたが、とてもやさしく助けてくれた。一瞬でも疑った自分が恥ずかしいと思うと同時に、こんなにも素晴らしい心の持ち主がいるのだと感動し、涙が出てきた。



信号機がない横断歩道を子ども達が渡っていた。私は、子ども達が渡り終えるまで、車を止めて待っていた。すると、最後に渡った六年生らしき子（分団旗を持っていたので）が、こちらを振り返り大きな声で、

「ありがとうございました！」

と言って歩いて行った。とても気持ちのよいあいさつで、見ている自分も清々しい気分になった。



三歳になったばかりの女の子が、覚えたばかりの歌を歌っていた。

♪もういくつ寝るとお正月♪

お正月には凧あげて、こまを回して遊びましょう。

早く来い来いお正月♪

「正月なのにどうして凧をあげないの？どうしてこまを回さないの？」

そう尋ねられて、近頃凧あげやこま回しを見なくなつたなあと気づかされた。ふと見ると、運動場の向こうの山に凧が引っかかっていた。

日吉の子は、凧あげをしているんだなと、なぜか嬉しくなった。

